

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 8 日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26884017

研究課題名(和文)第二次世界大戦後のアジア系アメリカ人の国際主義の歴史的研究

研究課題名(英文)Historical Research of Post-World War II Asian American Internationalism

研究代表者

大八木 豪 (OYAGI, Go)

東京大学・総合文化研究科・学術研究員

研究者番号：20740129

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、第二次世界大戦後の環太平洋地域において、アジア系アメリカ人の国際主義がどのように形成されてきたのかを考察した。アジア系アメリカ人関連の一次史料や雑誌・新聞、外交史料やその他の公文書を調査し、アジア系アメリカ人が、東アジアの問題・人々・国々をどのように見て関係を結ぼうとしていたのか、そしてアメリカ合衆国の外交政策にどのように介入しようとしていたのかを、1950年代と1990年代-2000年代の二つの時期についてそれぞれ説明する二つの論文を学術誌に発表した。

研究成果の概要(英文)：This research project examined the ways in which Asian American internationalism developed in the post-World War II Pacific Rim. Drawing on primary sources, magazines, and newspapers related to Asian Americans, as well as diplomatic and other official documents, I published two journal articles that explain the ways in which Asian Americans viewed and connected themselves with the affairs, countries, and peoples of East Asia, and intervened in U.S. foreign policies in the 1950s and in the period from the 1990s to the early 2000s respectively.

研究分野：アメリカ史

キーワード：アメリカ史 アジア系アメリカ人研究 人種・エスニシティ 国際関係

### 1. 研究開始当初の背景

合衆国の国境内部と外部の両方の文脈の中でアジア系アメリカ人の国際主義がどのように形成されてきたのかを考察する本研究を開始した当初、アメリカ史やエスニック・スタディーズの一分野であるアジア系アメリカ人研究において、トランスナショナリズムを強調する研究が盛んに行われるようになっていた。1990年代以降、これらの学問分野で、多くの研究者がトランスナショナリズムを提唱し、アメリカ史をグローバルな文脈に置き、関係性を重視した視点から歴史的事象を分析することの重要性を強調していたのである。トランスナショナリズムが、政治史・社会史・文化史の別を問わずアメリカ史研究全般の方向を大きく変えた一方で、アメリカ外交史の研究者は、人種、ジェンダー、言説といった従来社会史・文化史研究者が用いてきた分析概念を用いて合衆国と世界との関係を検証するようになっていた。また、アジア系アメリカ人研究に携わる研究者も、アメリカ史研究者と歩を合わせ、国境内だけではなく国境外の文脈にも注意を払い、太平洋を横断する人・モノ・資本・文化の移動に焦点を当て、「環太平洋」もしくは「太平洋世界」という概念を用いて、エスニック・スタディーズと地域研究とを結合させる研究を志すようになってきていた。

その一方で、人種、エスニック・グループ一般、もしくはアジア系アメリカ人の国際関係や外交政策への関与に関する従来の研究は、エスニック・グループの境界を固定的なものとして想定しがちだった。それに対して、本研究は、戦後のアジア系アメリカ人の国際主義の形成を彼ら彼女らのアイデンティティの構築と関連付け、アジア系アメリカ人の国際主義の構築過程のダイナミックさを捉えようとしながら、上記の学問分野における新しい研究の流れを押し進める試みとして構想された。

### 2. 研究の目的

本研究は、第二次世界大戦後の環太平洋地域において、アジア系アメリカ人の国際主義が、なぜ、そしてどのように、形成されてきたのかを明らかにすることを目的とする。アジア系アメリカ人のアーカイブ史料や雑誌・新聞、外交史料やその他の公文書をもとに、特に日系・中国系アメリカ人が、どのように東アジアの政府・人々を観察、想像し、どのような関係を取り結ぼうとしたのか、そして、アメリカ合衆国政府の対アジア外交政策にどのように介入したのかを実証する。そして、アジア系アメリカ人の視点から国境内外の社会史、政治史、文化史を探究する本研究は、アメリカ史研究、アジア系アメリカ人研究やエスニック・スタディーズから影響を受けてながら分野横断的にこれらの分野に貢献をなすことも目的とする。

### 3. 研究の方法

上記の通り、近年、本研究の方法論的枠組みに関連する研究が盛んに発表されてきているので、二次資料の収集と分析を行いながら、日本とアメリカ合衆国の公文書館や図書館に所蔵されている一次資料の収集と分析を行った。一次資料の収集の中心となったのは以下の機関である。

(1) 全米日系アメリカ人図書館 (Japanese American National Library、アメリカ合衆国カリフォルニア州サンフランシスコ)

日系アメリカ人の団体である日系アメリカ市民協会 (JACL) 関連の資料を収集した。

(2) スタンフォード大学フーヴァー研究所図書館・文書館 (The Hoover Institution Library and Archives, Stanford University、アメリカ合衆国カリフォルニア州スタンフォード)

中国系アメリカ人作家アイリス・チャンの個人文書に収められている資料を収集した。

(3) カリフォルニア大学バークレー校エスニック・スタディーズ図書館 (Ethnic Studies Library, University of California, Berkeley、アメリカ合衆国カリフォルニア州バークレー)

中国系アメリカ人研究者マーク・ヒム・レイの個人文書に収められている資料を収集した。

(4) カリフォルニア大学ロサンゼルス校ヤング研究図書館 (Young Research Library, University of California, Los Angeles、アメリカ合衆国カリフォルニア州ロサンゼルス)

1960年代終わりから1970年代初めにかけてのアジア系アメリカ人運動関連の資料と、1989年の天安門事件の中国系アメリカ人コミュニティに与えた影響に関する資料などを収集した。

(5) カリフォルニア州立公文書館 (California State Archives、アメリカ合衆国カリフォルニア州サクラメント)

20世紀終わりにカリフォルニア州下院議員を務めた日系アメリカ人の個人文書に収められている資料を収集した。

(6) 立命館大学修学館リサーチライブラリー (京都府京都市)

日系アメリカ人コミュニティで発行されてきた新聞の記事を収集した。

(7) 外交史料館 (東京都港区)

日系アメリカ人と1950年代の日本人短期農業労働者導入プログラムやその他の日米関係上の問題との関わりについて資料を収集した。

#### 4. 研究成果

##### (1) 主な研究成果

第二次世界大戦後のアジア系アメリカ人の国際主義の発展について考察する時、本研究は、アイデンティティ形成が国際主義の構築に果たした役割の大きさに着目した。合衆国におけるアジア系の人々が常にアジア系アメリカ人というアイデンティティを持っていたということをも前提とはせず、むしろ、アジア系アメリカ人というアイデンティティは社会的・歴史的に構築されてきた（そして、現在でも（再）構築されている）という考えを他のアジア系アメリカ人研究に従事する学者と共有しながら分析をすすめた。アイデンティティ形成という概念により、本研究は、アジア系アメリカ人の国際主義を分析するために二つの枠組みを得ることができた。

国際主義の第一の種類として、ディアスポラの国際主義が挙げられる。すなわち、ホームランドの政治や外交関係に介入すること、ホームランドを思い出したり想像したりすること、ホームランドに送金したり貿易を行うことなどを含むディアスポラによる政治的、文化的、経済的活動を通じて形成される、ホームランドと移住先とをつなぐ社会的な領域から生じる国際主義である。そして、もう一つの国際主義として、1960年代終わりから1970年代初めの時期に盛んになったアジア系アメリカ人運動の中から生まれてきた第三世界国際主義がある。既に研究者たちが論じてきたように、アジア系アメリカ人運動は、アメリカの帝国主義と人種主義によって抑圧されていた、合衆国内外の他の第三世界の人々と連帯しようとしながら、国籍を基にしたエスニックなアイデンティティを越えるアジア系アメリカ人というパンエスニックなアイデンティティを創りだした。アジア系アメリカ人運動の活動家たちは、社会問題をパンエスニックでトランスナショナルな観点から理解・解決しようとし、第三世界の人々と力を合わせようとしたのだった。本研究は、ディアスポラの国際主義とパンエスニックな第三世界国際主義という二種類の国際主義を用いて、第二次世界大戦後のアジア太平洋地域におけるアジア系アメリカ人の国際主義を分析した。

しかし、アジア系アメリカ人の国際主義は単線的に滑らかに発展してきたわけでもなかったことにも留意した。アジアとの関係を示すことにより、良好な人種関係を保ち、合衆国で安定した生活を送ることが阻害されることを恐れて、どんな形の国際主義にも反対するアジア系アメリカ人は決して珍しい存在ではなかったのである。また、上記の二種類の国際主義は必ずしも相互に排他的であるわけではなく、両者の間に摩擦が生じることもあれば、両立することもあるということにも注意する必要がある。国内的文脈・国

際的文脈両方の中で構築されてきた、アジア系アメリカ人の人種的アイデンティティによる二種類の国際主義が織りなす変動が、アジア系アメリカ人のコミュニティにおける政治と、国際関係、祖先のホームランドと合衆国との外交関係、そしてアジア太平洋地域における合衆国の外交政策や軍事政策に対するアジア系アメリカ人の政治的な取り組みを形づくってきたのである。

以上の基本的な枠組みから、以下では、特に1950年代の日系アメリカ人の国際主義と、1990年代から2000年代初めの時期のアジア系アメリカ人の国際主義に関する研究成果に焦点を当てて論じることとする。

##### 1950年代の日系アメリカ人の国際主義

1950年代に日本からカリフォルニア州に短期農業労働者を導入した国際的なプログラムの分析を通して、日系アメリカ人が、第二次世界大戦中の強制収容の記憶と冷戦の地政学の中で、日本や日米関係に関わる問題とどのように対峙していたのかを検討した。日系アメリカ人が、戦後の合衆国で市民権を回復しようと試みた時、他のアメリカ人によって依然として日系アメリカ人は日本人と混同され、人種化されているという認識を抱いていた。その認識によって、日系アメリカ人の国際関係に対する関与の仕方が規定されていたのだった。

コミュニティの指導者でワシントン D.C. でロビイスト・政界関係者として活動していたマイク・マサオカは、この戦時中の強制収容の原因となった人種化が依然として存在していると感じ、日本人短期農業労働者導入プログラムを日米の友好関係を促進するものとして構想し、日米両国政府に働きかけ実現に導いた。このプログラムにより、日本は、農村の余剰労働力を活用しながら外貨を獲得することができる一方で、アメリカは、日本の市民に民主的な生活を示すための良い機会を得ることができると主張したのである。そして、日系アメリカ人もまた、自分達が混同されている日本人の対米感情を良好なものにし、日本を合衆国の陣営に留めることに貢献するこのプログラムの受益者であり、愛国者としてこのプログラムを支持すべきだとも主張した。

しかし、日系アメリカ人の多くは、日系アメリカ人の人種化について同様の認識を持つがゆえに、他のアメリカ人による日系アメリカ人と日本人の混同の可能性を減ずるために、日系アメリカ人は日米関係の外に留まり続けるべきだと反対した。マサオカのプログラムは、アメリカ化し、アメリカ人として認知されるための戦前から続く努力を損なうものだと批判したのである。彼ら彼女らは、日米関係に影響されることのないよきアメリカ人になることを希望したのである。

このように、日系アメリカ人を日本と再結合させる日本人短期農業労働者導入プログ

ラムをめぐって、日系アメリカ人コミュニティは分裂した。そして、その分裂は、日系アメリカ人の人種化に関する認識が原因となっていた。その人種化ゆえに、マサオカは、日系アメリカ人は日米関係に積極的に介入すべきだと主張したのに対し、多くの日系アメリカ人は、日米関係を忌避すべきだと考え、マサオカの言動を危険視したのだった。

1990年代から2000年代初めにかけての時期のアジア系アメリカ人の国際主義

1990年代から2000年代初め、サンフランシスコ・ベイエリアのアジア系アメリカ人が、なぜ、そしてどのように、1930年代と1940年代の日本軍による残虐行為や戦争犯罪の被害者に対する日本政府の公式な謝罪と補償を要求し始めたのかを考察した。

1990年代初め、日本で歴史修正主義の動きが強まっていると感じたサンフランシスコ・ベイエリアの中国系アメリカ人たちは、1930年代と1940年代の日本の中国侵略の犠牲者たちを追悼する催しを行うようになった。これらの集合的記憶を形成する活動の結果、中国名を抗日戦争史實維護会、英語名を Alliance for Preserving the Truth of Sino-Japanese War とする団体が結成された。その名前が端的に示すように、この団体の目的は、日本の中国侵略の「真実」を発掘し、維持し、教育することだった。また、その犠牲者に対する謝罪と補償を日本政府に要求することも目的として掲げられた。日本軍による残虐行為を自ら経験したり、近親者が経験したりした会員たちは、公衆教育と研究を熱心に支援し、中国名を世界抗日戦争史實維護聯合會、英語名を Global Alliance for Preserving the History of World War II in Asia とする、同様の目的を挙げた連合体を1994年に設立した。

会員たちの公衆教育に対する取り組みは、政治の領域で実を結ぶこととなった。世界抗日戦争史實維護聯合會によって開かれた会議に触発されたカリフォルニア州下院議員マイク・ホンダが、1999年に、戦争犯罪の犠牲者に対して謝罪と補償を行うことを日本政府に求める下院合同決議 27 号 (AJR 27) を提案したのである。第二次世界大戦中に合衆国政府による日系人・日系アメリカ人の強制収容を経験した三世であるホンダは、日系アメリカ人の謝罪・補償要求運動であるリドレス運動の成功から、謝罪と補償は犠牲者の傷を癒やすということを学んだと説明した。また、戦争の記憶によって分裂している、彼の選挙区のアジア系アメリカ人コミュニティにとってもこの過去の傷が治癒する過程は重要であるということも強調した。アジア系アメリカ人運動やリドレス運動といったアジア系アメリカ人のアクティヴィズムの歴史に AJR 27 を置きながら、「レイプ・オブ・ナンキン」リドレス委員会 (RNRC) の会員を含む、他のアジア系アメリカ人も、ホンダの

決議案を支持した。そして、この決議は下院と上院の両方で可決されたのだった。

日系アメリカ人と中国系アメリカ人によって結成された RNRC は、アジア系アメリカ人のパンエスニシティを強調しながら、戦争被害者への謝罪と補償を日本政府に要求するだけでなく、サンフランシスコ平和条約にもとづいて日本政府に対する要求を妨げている合衆国の外交政策も批判した。その批判は、2001年に日本政府と合衆国政府によって条約締結 50 周年を記念する式典が行われたのに反対する会議を、カリフォルニア州大学バークレー校と共催したことに最も明瞭に現れていた。田中真紀子外務大臣とコリン・パウエル国務長官が、日本と太平洋に平和と繁栄をもたらしたとして条約を賞賛したのに対し、会議出席者は、条約はアジア・太平洋地域の国際関係にとって有害であるという反対の見解を提示したのだった。さらに、会議出席者は、被害者への謝罪と補償を日本政府に要求し、平和条約に対する支持をやめるよう合衆国に求めた。

このように、アジア系アメリカ人のアクティヴィズムの伝統にその取組を位置づけ、パンエスニックなアジア系アメリカ人というアイデンティティを発展させながら、サンフランシスコ・ベイエリアのアジア系アメリカ人は、日本政府に対して戦争被害者を救済することを求める運動を進めたのだった。

## (2) 国内における位置づけとインパクト

上記の事例研究をまとめた論文の学術誌への発表や、学会での報告を通して、従来研究がほとんど行われてこなかった、第二次世界大戦後のアジア系アメリカ人の国際主義の重要性を示した。また、本研究における、国境の内部と外部を接続するとともに人種の重要性を強調する視点は、アメリカ史研究やエスニック・スタディーズにおいて同様の視点をとる他の研究プロジェクトとの協働に道をひらくものだと考える。

## (3) 国外における位置づけとインパクト

本研究資金の受給期間中には英語を用いた学会報告・論文発表の機会はなかったが、受給期間中に申請した国際会議での報告が認められたので、2016年6月に開かれる同会議で、1960年代から1970年代にかけてのアジア系アメリカ人の国際主義について英語で報告する。また、その報告をもとに英語の論文をまとめ、国外の学術誌に発表する予定である。これらの活動を通じて、アメリカ史とエスニック・スタディーズにおける対話に参加したい。

## (4) 今後の展望

今後は、本研究を発展させて日本語・英語の両方で一冊の本にまとめ、国内・国外両方の研究者との対話を進めたい。また、国境の内外を貫く視点の重要性は、大学における教

育にも反映させ、学生がグローバル化の意義を考えながら、歴史的に考察するための視点を獲得する助けとしたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

大八木豪、アジア系アメリカ人の対日戦争謝罪・補償要求運動の形成過程 アイデンティティの変容とアクティヴィズムの系譜、アメリカ研究、査読有、50、2016、pp.107-127

大八木豪、マイク・マサオカと日本人短期農業労働者導入プログラム 人種化、冷戦の地政学、戦時強制収容の記憶、アメリカ史研究、査読有、38、2015、pp.73-93

[学会発表](計 3 件)

大八木豪、第二次世界大戦後のアジア系アメリカ人の国際主義 冷戦期の日系アメリカ人の(非)国際主義の考察を中心に、第33回日本アメリカ史学会例会、2015年7月11日、亜細亜大学(東京都武蔵野市)

大八木豪、1990年代から2000年代にかけてのアジア系アメリカ人と記憶の政治」、第49回アメリカ学会年次大会、2015年6月6-7日、国際基督教大学(東京都三鷹市)

大八木豪、1950年代の日系アメリカ人と日米関係」、第249回関西アメリカ史研究会例会、2015年5月10日、キャンパスプラザ京都(京都府京都市)

#### 6. 研究組織

(1)研究代表者

大八木豪 (OYAGI, Go)

東京大学・総合文化研究科・学術研究員

研究者番号：20740129